

三方五湖採集記

林 幸子

52年の秋分の日、いつもの女ばかりのメンバーで三方五湖の周辺を久々子湖の早瀬から三方まで歩きました。

久々湖の干拓は聞いていましたが、想像していたより大がかりなのに驚きました。縦横につけられた道をトラックが土砂を積んで、次から次へとほこりをあげて走り、目も口もあけていられないありさまで。昔シジミ取りをした湖畔のおもかげはなく、うめたては進められているのです。路傍のハギはまっ盛りですがほこりで色もない有様に、静かな湖畔を考えてやって来たのにと、がっかりさせられた道でした。

ところが、この道ばたの土砂の山に見たことのない植物が一面に繁っているのを見つけました。帰化植物みたいだなと思いつきながら走り寄って見ました。花も実もあり、果実はオナモミの果実に更に長いすどいとげをもったようなもので、用心しながらそっとつまむと意外にこのとげは軟いにおどろきました。この植物はウリ科の帰化植物でアレチウリでした。北米原産でとうふの原料の大豆の中に入って来たらしいとの事で湿り気が多い腐植土を好み、河岸などの沖積地に多い植物だったのです。はじめての植物にあえて、ほこりの道も気にならなくなりました。

やがてこの道からはずれて、タムラソウの美しく咲く道を行くと、湖畔の荒地のマアザミの花に気付き、草の中におりていくとその辺りは、荒した畑になっていました。ここで白い小さい花を見つけ、アゼトウガラシかと思ったが花がやゝ大きいので、一本つまみ取って見るとぷーンとシソの香がします。葉も三枚輪生になっている部分があり、これもはじめてのものだとわかって、さっそく採集しました。この植物はしらべてみると、ゴマノハグサ科のミソクサだとわかりました。

湖畔にはサクラタデ、アキノノゲシ、イボクサ、オモダカ、シロバナオオイヌタデ、クルマバナ、タムラソウ（大へん多い）、ダンドボロギク、クロバナヒキオコシなどが見られました。

水田は大変な湿田で、機械を入れることができないのですべて手作業でしていました。このあたりの田は江戸時代の後期にはまだ湖の中だったのを水位を下げて田にしたので、田の中には今でもシジミの貝がらがあると、田で働いていた人が話してくれました。この田からはるかに上の方に昔の湖畔の道路があり、松や竹が植えられ、ここを恋の松原とっていわれがある所だと教えられました。

このあたりの湿田にはミズオオバコが田の中に一面に生え、ピンクの花の盛りでした。その他キクモ、チョウジタデ、ヒルムシロ、シャジクモの一種、サンショウモなど、美田には見る事の出来ない植物でいっぱい田のあぜ道にしゃがんで観察を楽しみましたが、ここを耕作する人は大変だろうと思いつきながら、恋の松原の道を浦見運河へと歩きました。この運河ぞいの道も数年前にきた時とはうって変わって、山道は広いジャリ道になり、その時見たソクシンランは見あたら

ない道になっているのがっかりしました。

この日の目的は、菅湖のヒトモトススキを見るためでしたが、湖畔に来て見ると水ぎわは、コンクリートでかためられ、たくさんあったヒトモトススキの特徴のある株は見あたりません。ようやく草むらをかきわけて湖畔に出て見たら見事な大株があり、目的の採集をし、逆光ながらも写真にも写せました。

マルバハギなどにまじってヒガンバナがさかりの道を三方の駅へと歩きました。

来て見るごとに人手が入って壊わされていく自然がおしくてしかたがありません。

「植物への愛着心を育てて下さった堀先生、

自然へのいざないは、今はなき堀先生との出会いからだったのです。

昨年7月8日の堀先生の訃報は親を失った悲しみでした。きびしい中に温かいお人柄の先生に教えられた植物への愛着心は、一生消えることはありません。この3月はわたしにとって教職を去る年になりますが、植物を楽しむことには定年はないのが何よりの幸せです。山野を歩き、植物との対話ができる楽しみがあるのはすべて先生の温かいお導きがあったからです。先生との出会いがなかったら、植物を楽しめるきょうはなかったことを今更のように思うのです。

先生のおともをして初めて行った春の深谷へ行って見ると、20数年前にはじめて教えていただいた植物がその場所に今もみつき、当時がありありと思い出されます。昭和38年10月の高田から永平寺への採集会が最後でしたが、先生はわたしの心の中に生き続けてはげましてくださっているように思います。

最後に先生のご冥福を心からお祈りします。

(元足羽小学校)